

| | |
|-------|-----|
| 都道府県名 | 佐賀県 |
|-------|-----|

学校の概要（平成15年4月現在）

| | | | | | | | | | |
|-----|-----------------|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 学校名 | 佐賀大学文化教育学部附属小学校 | | | | | | | | |
| 学 年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 0 | 18 | 28 |
| 児童数 | 120 | 119 | 117 | 117 | 118 | 116 | 0 | 707 | |

研究の概要

1. 研究主題

学びが育つ学習環境デザインの研究
～教科担任制と評価を生かした取り組み～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

教科担任制による授業

- ・低学年 音楽、図画工作、体育
学校生活への適応を配慮し、学級担任による授業を中心にするため
- ・中学年 社会、理科、音楽、図画工作、体育
中学年から新しく始まる教科を加えて、専門性を生かした授業を行うため
- ・高学年 全教科（一部学級担任による授業もある）
ほぼ中学校と同様に専門性を生かした教科担任制による授業を行うため

生活、道徳、特活、総合は、基本的に学級担任が指導する。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度

テーマ
学びが育つ学習環境デザインの研究
～教科担任制を活用して～

研究の見通し
「環境」従前のとらえ方ではなく、用意されるカリキュラムや指導方法
・評価方法、そして人材や時間、そこで行われるコミュニケーションなども含めて「環境」としてとらえたうえで、児童の理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導を求めていけば、児童の豊かな学びが育つであろう。

研究の内容・方法

- (1) 学校カリキュラムの組織化と運用
- (2) 系統性を重視した指導と評価のあり方
- (3) 人的・時間的な工夫としての教科担任制の導入
特に、教科担任制では、次の点をねらいとする。
 - ・教師の個性・特性の発揮
 - ・カリキュラム評価につながる系統的で一貫性のある指導を行うこと
 - ・すべての児童に各教科等の研究の成果が反映されること
 - ・一人一人の児童の学びを複数の教師の目で見守っていくこと

平成15年度

テーマ
学びが育つ学習環境デザインの研究
～教科担任制と評価を生かした取り組み～

研究の見通し
「学習環境」を教師側からだけでなく、児童側からもとらえ直し、教師がどのような学習環境をデザインしていけばよいか、また児童がそれにと

うかわることができていけばよいのか、授業づくり、評価方法等について改めて問い直し、児童の理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導を行っていけば、児童の豊かな学びが育つであろう。

研究の内容・方法

- (1) 学校カリキュラムの組織化と運用
- (2) 系統性を重視した指導と評価の工夫
- (3) 人的・時間的な工夫としての教科担任制の導入
特に、教科担任制では、次の点をねらいとする。
 - ・教師の個性・特性の発揮
 - ・カリキュラム評価につながる系統的で一貫性のある指導を行うこと
 - ・すべての児童に各教科等の研究の成果が反映されること
 - ・一人一人の児童の学びを複数の教師の目で見守っていくこと

平成
16
年度

テーマ

学びが育つ学習環境デザインの研究
～教科担任制と評価を生かした取り組み～

研究の見通し

「学習環境」を教師側からだけでなく、児童側からもとらえ直し、教師がどのような学習環境デザインをしていけばよいのか、また児童がそれにどうかわることができていけばよいのか、授業づくり、評価方法等について改めて問い直し、児童の理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導を行っていけば、児童の豊かな学びが育つであろう。

研究の内容・方法

- (1) 小学校における教科担任制導入の意義や留意点の再検討及び整理
- (2) 学校カリキュラムの組織化と運用
- (3) 系統性を重視した指導と評価の工夫
- (4) 児童の自己評価力の育成

(3) 研究推進体制

学習環境部 教育計画委員会（行事、時間割、校時表等の改善）
学習環境委員会（施設設備、人材活用等の工夫）

研究部 研究委員会（企画・立案、理論構築）
各教科等部会（教科特性に基づく指導の改善）
四附属合同研究会
（情報交換、共通理解、カリキュラムの系統性・一貫性の創出）

指導法研究ではないので、学校カリキュラムを組織化するという前研究の考え方を実際の学校運営に生かせるように学習環境部を置いている。
各教科等の特性を生かした研究、教科等レベルでの小・中の系統性を明確にする研究が実現するような研究部の編成を工夫した。

平成15年度の研究成果及び今後の課題

- (1) アンケート調査結果の分析から
本校児童及び保護者を対象に行ったアンケートの集計結果（下記の表、参照）をもとに、教科担任制導入による研究の成果を考察する。

表1 アンケート集計結果（中・高学年の児童対象 H15.10月中旬実施）

| 質問項目 | 回答 | 中学年 | 高学年 |
|-----------------------------|----------|-----|-----|
| あなたは、教科担任の先生の授業を楽しみにしていますか？ | はい、とても | 44% | 24% |
| | 教科によっては、 | 48% | 66% |
| | あまりしていない | 5% | 4% |
| | その他 | 3% | 6% |

本校中・高学年児童を対象に、「あなたは、教科担任の先生の授業を楽しみにしていますか？」という質問項目でのアンケートを実施したところ、中学年では、「はい、とても」が44%、高学年では、24%という結果だった。その理由としては、「いろんな先生と勉強ができるから、みんなが興味をもつような授業をしてくれるから」などがあった。

「教科によっては」という回答は、中学年で48%、高学年で66%である。理由としては、「得意な教科や苦手な教科があるから」「優しい先生やこわい先生、楽しい授業・楽しくない授業があるから」といったものが挙げられていた。「あまり楽しみにしていない」「その他」と答えた児童は、その理由として、「授業の中味が大事で、教科担任の先生だからということはないから、どの先生でも変わりはないから」などを記述していた。

表2 アンケート集計結果（高学年の保護者対象 H15.10月中旬実施）

| 質問項目 | 回答 | 割合 |
|-------------------------------------|-------------|-----|
| 本校が教科担任制で授業を行っていることに對し、どのようにお感じですか？ | 今のままでよい | 53% |
| | だいたい今のままでよい | 29% |
| | 見直した方がよい | 12% |
| | 学級担任制の方がよい | 3% |
| | その他 | 3% |

高学年の保護者を対象に行ったアンケート結果を表2に示している。教科担任制で授業を行っていることに對し、どのように感じているかとの質問に對して、「今のままでよい」と「だいたい今のままでよい」という回答を合わせると、8割を超えており、おおむね教科担任制に對しては肯定的に受け止めてもらっていることが分かる。

「いつも授業が楽しいと子どもが言っています、それぞれ子どもの興味・関心を引き出すための工夫をしてもらっていると感じています、苦手だった教科が少しずつできるようになってきているようです」といった声が聞かれることは、教科担任制を導入して授業を行ってきたことの1つの成果の現れと言える。

しかし一方で、「教科担任制のあり方について見直した方がいいのではないか」や「学級担任制の方がいいのではないか」等の回答も少数ではあるが寄せられており、保護者の受け止め方として、どんな点がよくて、どんな点に問題があるのかをさらに細かく分析していく必要がある。

次に、保護者が教科担任制に對して「期待すること」として記述していたことを示す。

教科の専門性を生かした魅力ある授業や、各教科の本質や特性を踏まえた中味のある授業が展開されること。

子どもの興味・関心・意欲を喚起し、子どもの「わかる」「できる」を大切にした授業の中で学習意欲を高めるような指導が行われること。様々な教科担任の人柄にふれる機会となること。教師も人であり、子どもが様々な機会にいるいるな教科担任の人柄に触れることは、子どもの人間としての成長に大きく関わるということから。

子どもの将来や実生活につながる指導がなされること。それぞれの教科等の学習が、その場限りで終わるのでなく、学んだことが実生活の中で役立ったり、子どもの今後の成長に生きて働くものになること、あるいは子ども自身がそのことを感じ取れるようになること。

一方、保護者が教科担任制に對して「不安に思っていること」を整理して示す。

1 一人一人の子どもにしっかり目を向けてほしい。例えば、クラス内での子どもの人間関係やその日の子どもの体調等、学級担任ならすぐわかることが教科担任の場合は難しいのではないかと。

2 子どもと学級担任とのふれあいの時間を十分に確保してほしい。子どもと学級担任とが接する時間が減り、学級担任が学級の子どもの状況を十分把握できていないのではないかと、子どもと担任との人間関係がうまく築けないのではないかと指摘。

3 教師どうしの連絡を密にとってほしい。学習内容や進度について、個

々の子どもの様子等について、しっかりと連絡を取り合ってもらいたいということ。

4 同一学年の教科担任は、どのクラスにも同様に配置してほしい。同じ学年なのに、同様の教科担任制になっていないといったことに対する意見。

4については、限られた職員数という人的制約や教科によって週あたりの時数が違うことや各教師の担当時数等の関係で、なかなか調整が難しいのが現状である。現在の状況の中では教科担任の授業シフトを組むことは大変困難なことと言える。

その他、教科担任制は中学校からでよい、小学校段階では学級担任が一人一人の子どもを生活面・学習面から長所・短所を含め総合的に見て関わっていくべきである、教科担任制であるが故に、行事等が組みにくく、水泳大会やスケッチ会などがゆっくり時間をかけて行えないのではないかといった意見もあった。

(2) 学力検査結果の分析から

本校では、年度初め（4月）に「全国標準診断的学力検査（NRT）」を、年度末（2～3月）に「観点別到達度学力検査（CRT）」を毎年実施している。

次ページの表3に例を示すように、各学年ともに全国通過率に対し大きく上回っていることが確認できる。

ただ、国語・社会・算数・理科の4教科については、NRT及びCRTの結果によるデータをもとに学力の定着度を考察することができるが、他の教科等についての学力分析が今のところできていない。どのような方法で児童の学力を見取っていくかについて、今後検討が必要である。

表3 NRT集計結果例（H15年度6年生 H15.4.30実施）

| | 各教科の内容 と 通過率の全国比（全国 = 100） | | | |
|-----|----------------------------|-----------------|----------------|-------------------|
| 国 語 | 話すこと・聞くこと 111 | 書くこと 120 | 読むこと 114 | 言語事項 128 |
| 社 会 | わが国の農業や水産業 128 | わが国の工業生産 130 | 通信と国民生活 114 | わが国の国土のようす 134 |
| 算 数 | 数と計算 127 | 量と測定 146 | 図 形 141 | 数量関係 146 |
| 理 科 | 生物とその環境 124 | 物質とエネルギー 132 | 地球と宇宙 128 | |

教科担任制の導入にあたっては、次のような点を重視し、今後もよりよいものを目指していく必要性を感じている。

- ・児童の興味・関心を高めること
- ・複数の教師が児童に接することにより、より客観的な視点で児童に対応することができ、学習指導や生活指導をよりきめ細かに行うことができること
- ・個々の教師の専門性や指導力が発揮され、基礎的・基本的な学習内容を確実に定着させることができること
- ・中学校での教科担任制による学習へスムーズに適應できるようにすること

学力等把握のための学校としての取組

全国標準診断的学力検査（NRT）の実施（4月）

- ・2年生 …… 国語、算数
- ・3年生以上… 国語、社会、算数、理科

観点別到達度学力検査（CRT）の実施（2～3月）

- ・2年生 …… 国語、算数
- ・3年生以上… 国語、社会、算数、理科

